

## 視覚機能に難しさのある子どもが、読みの力を高める通級指導の在り方

学びの特性に応じた指導の工夫について

中間市立中間南小学校  
教諭 三原 靖子

こんな手立てによって…

通級指導において、児童の課題に合わせたビジョントレーニングの継続的な実施や、操作的な教材を使用した読みの段階的な指導を行うことで

こんな成果があった！

読みに苦手意識を感じていたA児が、単語や文章を読むための手段を獲得し、自分から積極的に読もうとする姿が見られるようになった。

### 1 考えた

視覚機能に難しさのあるA児は、ひらがなの読み方を理解することができず、学校での学習場面において、大きな困難を抱えている状態にあった。そして、それが原因により、特に文字の学習においては、努力してもなかなか結果と結びつきにくく、「どうせ無理」「自分にはできない」と、国語の学習全般において、苦手意識をもち始めている。

そのようなA児に対して、A児の課題に合わせたビジョントレーニングを、通級指導の始めに継続していくことと、見本に対応する言葉を選択肢から選ぶことを繰り返す操作的な教材を使用しながら、段階的に読みの学習を進めていくことで、読みの力を高めることができると考えた。

### 2 やってみた

ビジョントレーニングでは、「眼球運動」「視空間認知」「眼と体のチームワーク」の中の苦手とする課題に対応するトレーニングを選択し、継続的に実施した。また、学習の状態に応じて、ビジョントレーニングを集中的に実施する場面も取り入れた。

読みの学習では、「ひらがな読み（単語読み⇒一文字読み）」「短文読み＋濁音・半濁音、カタカナの単語読み」「文章読み＋促音・拗音の単語読み」の3つの段階に分けて実施した。その際、各段階で達成できなかった読みに対しては、次の段階でさらに細かな手立てを実施して、A児が読みの力を高めるための手立てを検証した。

### 3 成果があった！

通級での指導場面だけでなく、学級での活動やテストの際に、自分から獲得した読みの手段を使って、積極的に読んだり問題を解いたりする姿が見られるようになった。また、国語の学習に対する苦手意識が減り、自信をもって、意欲的に学習に取り組もうとする姿が、様々な場面で見られるようになった。

## 視覚機能に難しさのある子どもが、読みの力を高める通級指導の在り方

### 学びの特性に応じた指導の工夫について

1	主題設定の理由	3
	(1) 子どもの実態から	3
	(2) 教育の今日的課題から	3
2	主題の意味	4
	(1) 視覚機能に難しさがある子どもとは	4
	(2) 読みの力を高めるとは	4
	(3) 学びの特性に応じた指導の工夫とは	5
3	研究の目標	5
4	研究の方法	5
	(1) 子どもの実態から	5
	(2) 読む力を高める学習指導について	6
	(3) ビジョントレーニングを取り入れた学習指導の工夫から	7
5	研究の実際	8
	(1) 第1段階における指導の具体的な内容と結果	8
	(2) 第2段階における指導の具体的な内容と結果	11
	(3) 第3段階における指導の具体的な内容と結果	14
	(4) 総合的な結果と考察	17
6	成果と課題	18
	(1) 成果	18
	(2) 課題	18
	<引用文献・参考文献>	18

## 視覚機能に難しさのある子どもが、読みの力を高める通級指導の在り方

学びの特性に応じた指導の工夫について

中間市立中間南小学校  
教諭 三原 靖子

### 1 主題設定の理由

#### (1) 子どもの実態から

対象児童であるA児は、通常学級に所属している。1年生の2学期に母親・担任から、ひらがなを読むことが難しいという相談があり、3学期より通級指導教室を利用することになった。A児は、国語の授業の音読の活動をととも苦手としており、声を出さずに口だけ動かしている様子がたびたび見られた。また、国語のテストを受けるときには、問題が読めずに泣き出してしまうこともあった。

テストを受ける際は、担任が文章や問題文を読み上げることで、書いている内容を理解することができ、また、言葉による指示は正確に理解して、自分で行動することができている。しかし、7月に実施されたひらがなの読みの実態調査の結果は、50音中6音しか読むことができなかった。これらのことから、A児は、ひらがなの読み方がほぼ理解できていないことが分かり、学校での学習の場面において、大きな困難を抱えていると考えられた。

A児が、国語の授業になると表情が曇ってしまったり、宿題に対して取り組むことを嫌がったりすることから、国語、特に文字を読むことに対する苦手意識を感じ始めている可能性がある。A児が、分かる楽しさや喜びを感じながら、ひらがなを読むための手段を獲得し、その使い方を学んでいくことは、今後、自分自身のよさや可能性に気付き、学習に対する意欲や自信を高めることにつながり意義深いと考え、本主題を設定した。

#### (2) 教育の今日的課題から

平成28年度4月から、障害者差別解消法が施行された。この法律は、障害のある人もない人も、互いにその人らしさを認め合いながら、共に生きる社会を目指している。この法律では「不当な差別的取扱い」を禁止し、「合理的配慮の提供」を求めている。学校における合理的配慮の提供は、一人一人の障害の状況や教育的ニーズ等に応じて決定され、精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させることが目的になっている。通級指導教室に通ってくる児童の多くは、学習面・生活面において、何らかの困難を抱えている。そのことが原因で、学習や対人関係における失敗経験を重ね、自己肯定感を低下させてしまい、様々な活動に対して意欲を失っている児童が増えているのが現状である。これらのことから、通級指導教室においては、その指導を行うにあたって、子ども自身の学びに対する積極的な姿勢を引き出すことが求められている。そのために、児童が自分自身の得意なところを知っ

て伸ばしていくとともに、苦手さと向き合い、改善していくための手段を一緒に考えながら身に付けさせていくことが必要である。さらに、児童の学びの特性を適切に把握し、それらに応じた適切な指導を行っていくことで、障害による学習上または生活上の困難を改善・克服し、通常学級における指導においても、その指導の効果が発揮されることにつながると考えられる。児童の抱える困難に対して、学びの特性を適切に把握し、それらに応じた適切な指導を行っていくことは、合理的配慮の在り方を明確にし、自由な社会に効果的に参加することへ、つながるものとする。

## 2 主題の意味

### (1) 視覚機能に難しさがある子どもとは

視覚機能に難しさがあるA児の状態としては、以下の状態が挙げられる。

- はさみを使って直線上や曲線上をうまく切ることが難しいなど、手先を使った作業全般に渡って、不器用さが見られる。
- 投げられたボールをうまく受け取ることが難しい。また、体操等でまねをして体を動かすことがスムーズにできない。
- 文字と音が結びつきにくく、ひらがなを読むことが難しい。
- 書くことが苦手で、ひらがなの書き間違いが多い。
- 読むときに、大きく頭や体を動かす様子が見られる。

A児は、視覚情報を脳に入力する機能と、視覚情報を脳で処理する機能に難しさがあると考えられる。そのため、遊びでも勉強でも多くの労力を必要としている状態にある。特に、文字の学習に対しては、努力してもなかなか結果と結びつきにくく、「どうせ無理」「自分にはできない」と、強い苦手意識をもち始めている。さらに、国語の学習だけではなく、他の学習や活動でも、自信を失いつつある様子が見られ始めている。

### (2) 読みの力を高めるとは

A児が、「読みの力を高めた」具体的な姿を、以下のように捉える。

#### 【第一段階】

- ひらがな50音を読むことができる。
- 文字のかたまりを読んで、意味を理解することができる。

#### 【第二段階】

- 濁音・半濁音を読むことができる。
- 2～3語文程度の文を読んで、意味を理解することができる。

#### 【第三段階】

- 促音や拗音を読むことができる。
- 多語文×5行程度の文を読んで、意味を理解することができる。

### (3) 学びの特性に応じた指導の工夫とは

学びの特性に応じた指導の工夫とは、視覚機能を向上させるためのビジョントレーニングや、操作的な教材を使用した段階的な読みの学習を取り入れた指導のことである。これらの学習を、通級での個別学習の際に、楽しみながら繰り返し取り組むことによって、A児が分かる楽しさや喜びを感じながら、文章を読むための手段を獲得し、自分からすすんで使おうとすることができると思う。

ビジョントレーニングとは、目で見える力を高めるためのトレーニングのことであり、眼球運動トレーニング・視空間認知トレーニング・目と体のチームワークトレーニングの3種類に分けられる。指導の工夫として、A児の実態に応じて選出したビジョントレーニング課題を、学習の始まりに継続的に実施していく。

操作的な教材を使用した段階的な読みの学習とは、「見本」を提示し、次にいくつかの「選択肢」を提示して、「見本」と同じものを選択させていく方法のことである。見本に対応する言葉を、選択肢から選ぶことを繰り返していくことで、絵に対応する音のイメージを全体的につかむことができると思う。

段階的な読みの学習の進め方とは、A児の読みの力を高めた姿に応じながら、学習を進めていくことである。

## 3 研究の目標

視覚機能に難しさのあるA児の通級指導において、ビジョントレーニングや操作的な教材を使用した段階的な読みの学習を取り入れることによって、A児が分かる楽しさや喜びを味わいながら、文章を読むための手段を獲得し、自分から進んで使おうとすることができ、読む力を高めることができると思う。

## 4 研究の方法

### (1) 子どもの実態から

図1・図2は、A児のWISC-IV知能検査の結果である。「処理速度」の得点が、他の3つの指標の得点に対して低いことから、形を正確に捉えることや、目を見たことをすぐに覚えることが苦手であることがわかる。さらに、下位検査の結果では、「符号」や「絵の抹消」がほ

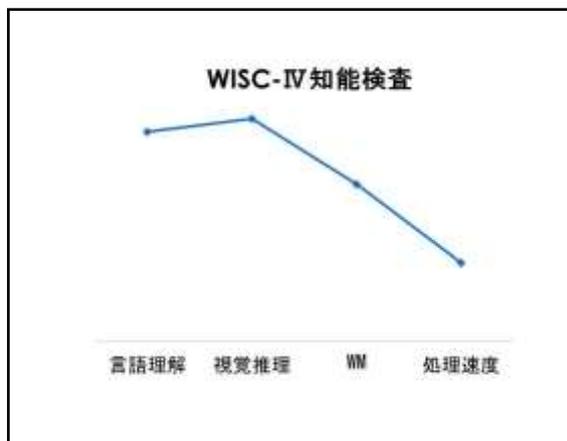


図1 WISC-IV知能検査の結果（指標）

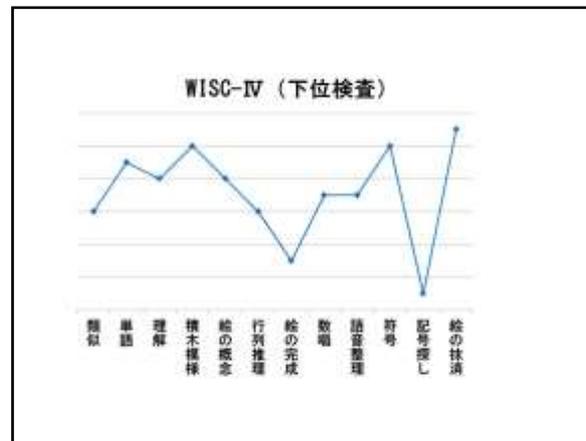


図2 WISC-IV知能検査の結果（下位検査）

ば平均の数値であることに対して、「絵の完成」と「記号探し」の得点がかかなり低いことが分かる。これらのことから、視覚刺激に素早く反応することや視覚的な長期記憶は苦手であり、無意味な記号や複雑な形に関して見分けることは得意ではないことが分かり、視覚的な入力機能に焦点を当てた学習に取り組んでいくことが大切であると考えられる。また、「ワーキングメモリー」の得点も一般的な平均と比較すると高くはなく、それに関する「数章」「語音整理」の検査に差が見られないことが分かる。これらのことから、A児が一度に覚えることが出来る量は、それほど多くないことが考えられ、調節していくことが必要であると考えられる。

その一方で、「積木」「符号」の得点が高いことから、全体を部分に分けて見ていくことや視覚的な短期記憶、獲得している力の中での事務処理は得意であることが推測され、複雑な形を理解したり覚えたりする学習の過程で、操作的な活動を取り入れていくことは有効であると考えられる。

また、図3は、A児がフロスティック視知覚検査で検査Ⅱ「図形と素地」を回答した様子である。A児は、他の図形と交錯している図形を見分けることができる力を図るこの項目の得点が最も低く、重なった線を見分けることや、形を捉えて見分けることが苦手であることが難しいと言える。



図3 フロスティック視知覚検査の解答の様子

## (2) 読む力を高める学習指導について

読むことは、学校生活や社会生活で必要とされる基本的な力であり、国語だけでなく他の教科も含めた学習全体に影響していく。

河村(2011)は、読みの習得に関して、初期の読みと読みの熟達の2つの段階を設定している。初期の読みは、単語の文字を音に系統的に対応づけ、音声情報へと変換しながら、構音システムを用いてアウトプットする段階である。読みの熟達は、読み手が、個々の単語から文の意味を理解し、さらに複数の文の意味をつなげて、文章に描かれている状況をイメージしていく段階である。さらに、河村は、初期の読みの段階につまずいている児童への支援として、「見本合わせ法」が効果的であると述べている。見本合わせ方による読みの学習は、全体から部分へと進める。つまり、最初に、「き」「り」「ん」という一文字読みの学習ではなく、「きりん」について、言葉・意味・読みの統合されたイメージを長期記憶にしっかりと形成させていくことから始めていく。これが、形成されることによって、「き」「り」「ん」という音声を「きりん」という1つのまとまりの表象の中で捉えることができ、言語性短期記憶に苦手さがある児童も習得しやすいと述べている。また、文章を構成する単語の読みの力をつけていき、次に、文章の読みにおいて、単語の力を頼りにしながら、文章全体を理解していくことを目標とすることが大切であるとも述べている。

これらのことから、A児に対する読みの指導において、「見本合わせ方」の理論を取り入れた教材を開発・使用していくことと、段階的に読みの学習を進めていくことが必要であると

考える。A児に対する読みの段階的な指導は、図4の通りである。

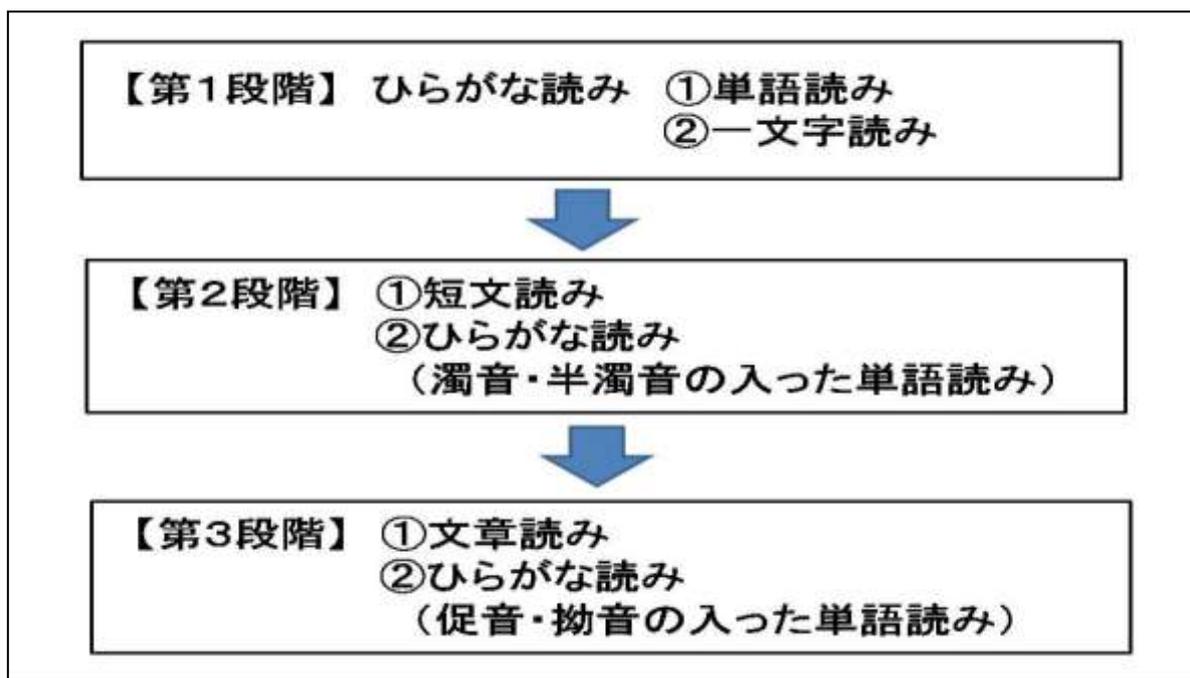


図4 読みの段階的な指導

### (3) ビジョントレーニングを取り入れた学習指導の工夫から

ものを見る力は、生まれつき備わっているものではなく、生まれてから徐々に発達し、6歳くらいまでにその基礎ができあがると言われている。しかし、何らかの理由で必要な機能の発達が遅れたり、偏ったりして「見えにくさ」の原因となる。「見えにくさ」を抱えた状態をそのままにしていると、様々な場面で、努力しても結果が出にくいいため、意欲を失い、ますます結果が悪くなるという悪循環を起しやすくなると言われている。このような児童に対して、北出(2009)は、見る力を育てる訓練（以後、ビジョントレーニング）が効果的であると述べている。ビジョントレーニングとは、視覚機能を「入力」「情報処理」「出力」の3つの機能に分類して、その中の苦手な働きに対して行うことで、見る力を高めるトレーニングのことである。

さらに、北出は、ビジョントレーニングを学習指導に取り入れていく際に、以下の点に留意するように述べている。

- 眼球運動・視空間認知・目と体のチームワークの中から、児童の課題に合った適切なトレーニングを選択して実施すること。
- できれば毎日（難しければ、1日おきでも）5～15分ずつ実施する。
- トレーニングは、どのようなものでも苦手なことに取り組んでいくという側面も持っているため、指導者が子どもと一緒に楽しみながら進めていくことが大切。
- 適切なレベルの課題を設定する。2回に1回成功できるレベルのものがよい。
- できるようになったところを、子どもに伝えて、一緒に喜ぶことで、達成感をもたせるようにする。

これらのことを参考にしながら、通級指導においてビジョントレーニングを取り入れていく際に工夫していく点を、以下の図5のようにまとめた。

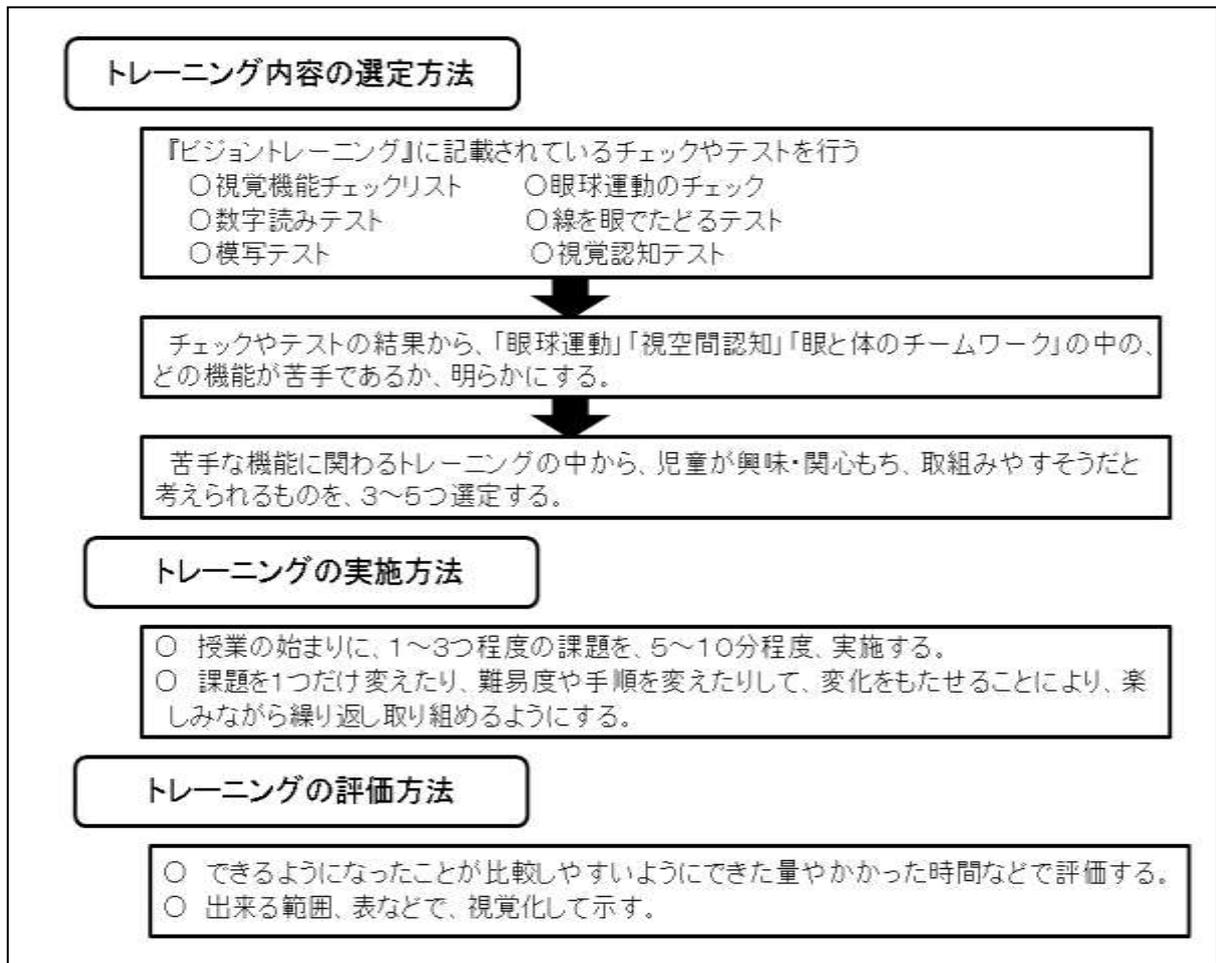


図5 ビジョントレーニングを実施する際の工夫点

## 5 研究の実際

### (1) 第1段階における指導の具体的な内容と結果

#### ① 具体的な指導の内容

第1段階では、単語読み→一文字読みの順で、ひらがなの読みができることを目標とした。この段階を、具体的には、表1のように計画し、1年生の3学期に実施した。

ビジョントレーニングの実態把握では、「追従性眼球運動のチェック」「線を目でたどるテスト」「視覚認知テスト」に難しさが見られたため、追従性眼球運動のトレーニングと視空間認知のトレーニングを中心に実施することとした。追従性眼球運動のトレーニングは、対象をゆっくりと眼で追う動きを獲得するために、鉛筆を使った眼球体操やお手玉タッ

長期目標	○ひらがな（50音）を読むことができる。 ○3語文程度の短い文章を読んで、意味を理解することができる。	
短期目標	○ひらがな（50音）の一文字読みができる。 ○単語を読んで、意味を理解することができる。	
指導内容	手立て	評価
○ビジョントレーニングに取り組むことができる。	・授業の開始の5分間を使って取り組むことで、継続して実施する。 〔カード分け・お手玉タッチ・ピッチャー・玉キャッチ・眼球体操・ジオボード・各種パズル〕	□目の動きがスムーズになる。 □見本を見ながら、形を作ることができる。
○単語を読んで、意味を理解することができる。	・見本を見ながら、絵と単語のマッチングを繰り返し行う。 ・文字を組み合わせて、単語を作る練習をしたうえで、文字と絵のマッチングを行う。	□単語と絵を正しくマッチングすることができる。 □文字を組み合わせて単語を作り、絵と正しくマッチングすることができる。
○ひらがな50音の一文字読みができる。	・ひらがなパズルをすることで、形を意識させながら、文字と音を結びつけるようにする。	□ひらがな50音が正しく読める。

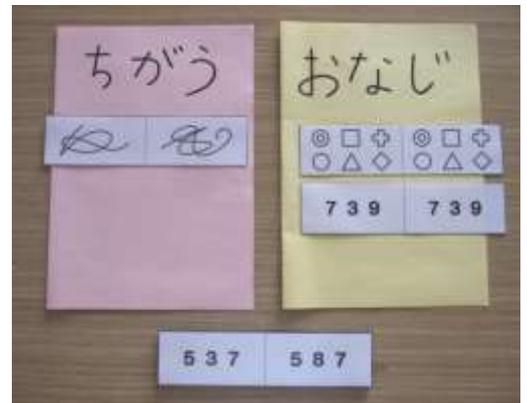
表1 第1段階の学習計画

チ（資料1参照）、カード分け（資料2参照）などを中心に実施した。視空間認知のトレーニングでは、ジオボード（資料3参照）や数種類のパズル（資料4参照）を使った形の再現、体の動きを模倣するまねっこゲームなどを行なった。

これらの活動は、通級指導の始めに、5～10分程度の時間で実施するようにした。A児が意欲をもって楽しみながら取り組むことができるようにするために、A児と相談して内容を決めたり、「前はここまでできたから、今日はどれだけできるかな」などの言葉かけを行い、目標を具体的にしようえで取り組んだりするようにした。



資料1 お手玉タッチ



資料2 ビー玉キャッチ



資料3 ジオボード



資料4 各種パズル

ひらがな読みの学習では、見本と同じものを自分で操作して選択していく教材を使って、単語読みの学習を進めていった。資料5は、見本を見ながら絵と文字を、マッチングさせていく教材である。A児が、操作する手を止めてしまったときや間違っ



資料5 マッチング教材①

マッチングしたときは、教師が見本の絵を指差しながら、文字を読むことによって、A児に正しいマッチングに気づかせていくようにした。また、資料6のように、課題の出し方や操作の仕方に少しだけ変化をもたせた教材も使用し、A児が常に意欲をもって取り組めるようにした。さらに、A児がマッチングに自信をもってきた段階で、見本なしで取り組むことについて、相談しながら進めていくようにした。

次に、単語を一文字ずつ分けてマッチングさせる教材（資料7参照）を使用して、一文

字読みの学習を進めていった。この学習に取り組む際も、見本を準備し、まずは見本を見ながら絵と文字をマッチングさせていくようにした。文字の順番を間違えて並べたときや、文字を抜かして並べてしまったときは、自分で見本の文字を指差しながら確認させることで間違いに気付かせ、再度、正しく組み立てることができるようにした。



資料6 マッチング教材②



資料7 マッチング教材③

## ② 結果

追従性眼球運動の力を高めるための鉛筆を使用した眼球体操では、トレーニングの始めは、鉛筆の上につけた対象物の動きを目で追うことができず、眼球の動きが途切れたり反対の方向へ戻ったりすることが多かった。A児も、苦手意識を感じ始めた言動が見られてきたため、取り組む量を減少させ、お手玉タッチを中心に取り組むようにした。このトレーニングに対しては、手や肘、膝などに当てるという体全体を使った動きを楽しむことができたため、繰り返し取り組むことができた。トレーニングの始めは、お手玉に当たらず空振りをするが多かったり、目の動きがお手玉についていけない様子も見られたりしたが、楽しみながら繰り返すことで、ほとんど失敗することなく、体の様々な部位をお手玉に当てることができるようになった。それと同時に、眼球体操の目の動きも、特に横の移動させた対象物をしっかりと目で追うことができるようになり、A児自身から「今、うまく見ることができたよ。」等の言葉を聞くことができるようになってきた。しかし、縦や斜めに動く対象物は、まだうまく追うことができず、目が逸れてしまったり、上に戻ったりするという様子が見られた。

ひらがな読みの学習では、始めた当初は見本を見ながらにもかかわらず、正しくマッチングができないこともあったA児であったが、6時間ほど行った頃から、自分から「もう見なくてもできる。」と見本の必要性がないことを伝えてきた。ただ、分からないときは、「見本を見せて。」と伝えてきたり、分からない文字を指で差して読み方

長期目標	○ひらがな（50音）を読むことができる。 ○3語文程度の短い文章を読んで、意味を理解することができる。	
短期目標	○ひらがな（50音）の一字読みができる。 ○単語を読んで、意味を理解することができる。	
指導内容	手立て	評価
○ビジョントレーニングに取り組むことができる。	・授業の開始の5分間を使って取り組むことで、継続して実施する。（カード分け・お手玉タッチ・ビーズキャッチ・眼球体操・ジオボード・各種パズル）	□目の動きがスムーズになる。 □見本を見ながら、形を作ることができる。
○単語を読んで、意味を理解することができる。	・見本を見ながら、絵と単語のマッチングを繰り返して行う。 ・文字を組み合わせて、単語を作る練習をしたうえで、文字と絵のマッチングを行う。	□単語と絵を正しくマッチングすることができる。 □文字を組み合わせて単語を作り、絵と正しくマッチングすることができる。
○ひらがな50音の一字読みができる。	・ひらがなパズルをすることで、形を認識させながら、文字と音を結びつけるようにする。	□ひらがな50音が正しく読める。

表2 第1段階の学習の評価

を確認してきたりする様子が見られるようになった。学習の過程では、自分でマッチングさせたものを、自分で確認し「あ、間違っていた。」とつぶやきながら修正する様子や、単

語をみながら最初の文字や次の文字を見ながら、読めない文字を推測して、何と書かれているのか考えたりする様子が頻繁に見られるようになった。最終的には、ほぼ全ての課題に対して、見本を見たり教師に確認したりすることなく、自分で正解することができるようになった。

第1段階の結果として、表2に記載されているように評価した。

## (2) 第2段階における指導の具体的な内容と結果

### ① 具体的な指導の内容

第2段階では、濁音・半濁音の入ったひらがな読みに加え、カタカナの読みができるようになることと、短い文章（3～4語文×3行程度）を読んで、その意味を理解できることを目標とした。これは、A児が使用する教科書や日常的に読むものの中には、カタカナが多く使用されて

おり、カタカナを読めないことが、意味を理解する際に大きく関係していることが明らかになったからである。第1段階の結果から、具体的に表3のように計画して、2年生の1学期に実施した。

ビジョントレーニングでは、追従性眼球運動の動きについて、まだ課題が残っているため、第1段階から引き続いて、鉛筆を使った眼球体操やお手玉タッチ、ビー玉キャッチなどを実施した。それに加えて、より目の動きに焦点を当てたトレーニングを実施するため、パソコンソフトを使ったトレーニングを取り入れていくこととした。

ひらがな読みでは、濁音や半濁音が含まれる単語やカタカナの単語と図をマッチングさせていく教材（資料8参照）を使用して行った。手順は、第1段階での取り組みとほぼ同じである。文章読みは、「かおを あらう」などの2語文と文の内容を表す絵を、見本を見ながら、マッチングさせていく教材（資料9参照）を使用して行った。まず、2つの文章と2つの絵をマッチ

長期目標	○ある程度長い文章（8語分×5）を読んで、問題に答えることができる。	
短期目標	○短い文章（3～4語文×3）を読んで、問題に答えることができる。 ○濁音・半濁音、カタカナを読むことができる。	
指導内容	手立て	評価
○ビジョントレーニングに取り組むことができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業の開始の5分間を使って取り組むことで、継続して実施する。（従来のトレーニング+パソコンソフトを使ったトレーニング）</li> <li>文章を読む際は、舌手意識を感じないように、量や内容に配慮する。</li> <li>パソコンソフトやゲーム形式の活動を取り入れて繰り返し学習することで、より言葉がスムーズに読めるようにする。</li> <li>見本を見ながら、絵と文字のマッチングを繰り返し行う。</li> <li>慣れてきたら、できるだけ見本は見ないように言葉かけする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>□目の動きがスムーズになる。</li> <li>□より複雑な形の違いに素早く気づくことができる。</li> <li>□短い文章（3～4語文×3）を読んで、問題に答えることができる。</li> <li>□濁音や半濁音、カタカナの入った単語と絵を正しくマッチングできる。</li> </ul>
○短い文章や、問題文を読んで問題に答える。		
○濁音・半濁音、カタカナを読むことができる。		

表3 第2段階の学習計画



資料8 カタカナのマッチング教材



資料9 短文のマッチング教材

ングさせることから始め、A児に文を読むという苦手意識をもたせないようにした。慣れてきたところで、少しずつ文章と絵の数を増やし、その中に読み間違いをしやすい文章も加えていくようにした。(例:「かおを あらう」「かおを ふく」等)さらに、2語文×2行→3語文×2行→3・4語文×3行という風に、読む量を少しずつ増やし、簡単な質問に答える学習に取り組んでいった。しかし、3・4語文×3行程度の文章になったところで、単語を読み飛ばしたり、同じ部分を何度も読んだり、途中で読むことをやめてしまったりという様子が、たびたび見られるようになってきた。この時期に、学校での音読の活動や家庭での宿題に取り組む際に、強い抵抗を見せるようになってきた。そのため、もう一度、A児の読みの学習の様子を見直し、計画を立て直すことにした。

読み間違いが起こりやすい3・4語文×3行程度の文章を、一気に読ませるのではなく、一つずつ分けて読ませると、スムーズに読むことができ、文の意味も理解することができた。また、複数の文章を読むときのA児は、いつもよりも頭や体を上下、左右に動かしている様子が見られる。これらのことから、眼を早く動かして見たいものを見つけたり文章を読んだりする際に必要な跳躍性眼球運動の力や、より細部に注目して判断していくことができる力を高めていくことが必要であると考えた。A児の読むことに対する苦手意識を早急に減らしていくためにも、ビジョントレーニングの単元を計画し、集中して実施していくこととした。

## ② 単元「みるみるランドを制覇しよう」について

単元目標及び単元指導計画を表4に示す。

単元名	自立活動「みるみるランドを制覇しよう」
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 対象物を眼で追い続けたり、見つけたりする力を高める。</li> <li>○ 細部に注目して、判断する力を高める。</li> <li>○ うまくいった理由やうまくいかなかった理由を、言葉で説明することができる。</li> </ul>
単元指導計画(総指導時数6時間)	
1次 みるみるランドLv1をクリアしよう…2時間	
2次 みるみるランドLv2をクリアしよう…4時間	

表4 単元目標及び単元指導計画

本単元では、児童が能動的に活動できるように、ゲーム形式の活動を取り入れていった。「ぐるぐるの間」「忍者の間」(資料10、11、および表5参照)などネーミングを工夫した8つの活動で構成することにより、興味や関心、ク



資料10 漢字の間

リアしようという必然性をもちながら取り組むことができると考えた。また、クリアした活動に対しては、少しずつ変化をつけて、さらに繰り返し取り組ませっていくことにより、

漢字の間	提示された漢字と同じ漢字を探して、タッチする。	跳躍性眼球運動
忍者の間	提示されたものと同じ単語、または短文がかかれた筒をストローで吹いて倒す。	跳躍性眼球運動
記憶の間	簡単な絵を見て覚えて、同じ絵を描く。	視覚的短期記憶 視空間認知
釣りの間	魚の先端についている小さな穴にひっかけて魚を釣る。	視空間認知 目と体のチームワーク
ゴロゴロの間	ネットの下をゴロで転がした球を打ち合い、落ちないようにラリーを続ける。	追従性眼球運動 視空間認知
まねっこの間	提示された絵と同じポーズを取る。	視空間認知 目と体のチームワーク
我慢の間	ダンボールの上のビー玉やピンポン玉を落とさないように操作する。	追従性眼球運動 跳躍性眼球運動
形の間	提示されたものと同じ形を、積み木で作る。	視空間認知

表5 8つの間について

より多くの体験をさせることができ、見る力の向上につながると考えた。

指導に当たっては、児童が自分から意欲をもって取り組めるように、取り組み方を分かやすく説明した。その際、教師が演示をするとともに、簡単な言葉での説明を加えることで、理解を促していきたいと考えた。また、課題に対してうまく取り組めたときは、賞賛したりクリアシール（資料12参照）を貼ったりすることで次の活動への意欲を高めていった。うまく取り組めなかった際は、なぜうまくいかなかったのか、うまくいくためには次に取り組むときにはどうすればいいのかを考えさせていった。そうすることで、うまくいくための方策を自分で獲得することにつながると考えた。

授業に関しては、単元を通して、「トレーニングタイム」→「チャレンジタイム」という流れで行った。これは、同じ流れで授業を行うことで、児童が見通しをもって活動することができると思ったからである。トレーニングは、3つ程度の活動を取り入れ、児童が常に集中した状態で取り組めるように配慮した。また、苦手意識が強まらないように、児童の負担にならない適切な量や時間で構成した。

総指導時数である6時間を通して、A児は、どの課題もクリアの基準を少しずつ高く設定



資料11 まねっこの間

	6月8日	6月9日	6月10日	6月16日
にんじやのみ				
かたくりのみ				
さあぐのみ				
つりのみ				
ゴロゴロのみ				
まねっこのみ				
かまんのみ				
かんじのみ				

資料12 みるみるランドの評価表

してもクリアすることができるようになった。中でも、早さを求められる「漢字の間」「まねっこの間」「忍者の間」では、当初設定していたものより、かなり時間を短く設定してもクリアできるようになった。特に、「漢字の間」では、どのようにしたら、もっと早く見つけることができるのか考えて、自分で立ち位置を調節しながら、全体を効率よく見ることができるような場所を見つける様子が見られた。また、「ゴロゴロの間」では、ラリーがなかなか目標の回数に到達せず、落ち込む場面が見られた。その際、どのようにしたらいいか迷っていたので、教師がいくつかのやり方を提案した。A児は、その中から、「球の行方を眼でしっかりと見続ける」「できるだけやさしく球を打つ」の2つを選択し、チャレンジタイムで取り組んでみたところ、見事にラリーが続き、クリアすることができた。次の時間にも、そのやり方をしっかりと覚えていて、自分で確認しながら取り組むことができた。

### ③ 結果

「みるみるランド」の単元が終了したあとは、再び、第2段階の指導に戻り、継続的に取り組んだ。その結果、3～4語文×5行程度の文章であれば、読み飛ばしや同じ部分を何回も読むということは、ほとんど見られなくなっていた。また、多少の動きは残るものの、頭や体を大きく動かしながら読む様子は見られないようになり、一方で、眼をしっかりと動かして読む様子が頻繁に見られるようになってきた。プリントを使用しての読みでも、それほど嫌がることなく取り組むことができ、また、問題文を読んで、ほぼ正確に答えることができた。

濁音や・半濁音、カタカナの単語読みに関しては、濁音・半濁音の含まれた単語は、絵と正確にマッチングできるようになった。しかし、カタカナの単語は、「タ」と「ク」、「ン」と「ソ」、「ツ」と「シ」など形の似た文字を間違えてしまうことが多く、絵とマッチングは8割程度に留まった。第3段階において、手立てを考慮して取り組んでいく必要がある。

第2段階の結果として、表6に記載されているように評価した。

長期目標	○ある程度長い文章(8語文×5)を読んで、問題に答えることができる。	
短期目標	○短い文章(3～4語文×3)を読んで、問題に答えることができる。 ○濁音・半濁音、カタカナを読むことができる。	
指導内容	手立て	評価
○ビジョントレーニングに取り組むことができる。	・授業の開始の5分間を使って取り組むことで、継続して実施する。 (従来のトレーニング+パソコンソフトを使ったトレーニング) ・文章を読む際は、音や意味を感じないように、量や内容に配慮する。 ・パソコンソフトやゲーム形式の活動を取り入れて繰り返し学習することで、より言葉をスムーズに読めるようにする。	○目の動きがスムーズになる。 ○より複雑な形の漢字に早く気づくことができる。 ○短い文章(3～4語文×3)を読んで、問題に答えることができる。 ○濁音や半濁音、カタカナの入った単語と絵を正しくマッチングできる。
○短い文章や、問題文を読んで問題に答える。		
○濁音・半濁音、カタカナを読むことができる。	・見本を見ながら、絵と文字のマッチングを繰り返して行う。 ・慣れたら、できるだけ見本を見ないように言葉かけする。	

表6 第2段階の学習の評価

### (3) 第3段階における指導の具体的な内容と結果

#### ① 具体的な指導の内容

第3段階では、促音や拗音の入ったひらがな読みに加えて、第2段階で達成できなかった課題であるカタカナの単語読み、さらに、ある程度、長い文章(8語文×5行程度)を読んで、その意味を理解できることとした。第1段階の結果から、具体的に表7のように計画して、2年生の2学期に実施した。

ビジョントレーニングでは、追従性眼球運動だけではなく、跳躍性眼球運動の動きも高めていくために、「よくみるランド」で実施した「漢字の間」「我慢の間」「忍者の間」の課題を取り入れていくことにした。

第2段階で達成できなかったカタカナの単語読みでは、A児は、形の似ているカタカナを見分けることが難しく、読み間違えるこ

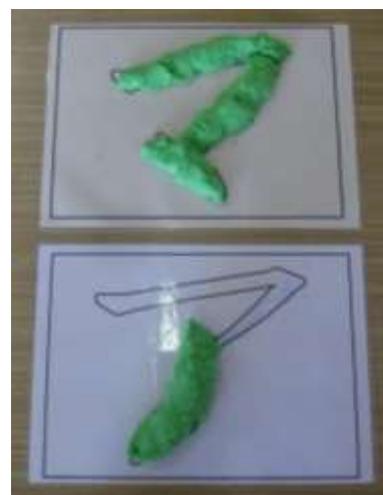
とが多かった。このことから、カタカナの形を意識させる学習に取り組んでいくことにした。具体的には、粘土でカタカナの形を作る活動を通して（資料13参照）、形が似ているカタカナの違いの部分を意識させるように言葉かけをした。また、同時に、カタカナの単語と絵をマッチングさせる学習にも取り組んでいくことで、確実に定着させることができると考えた。促音や拗音の入った読みでは、ひらがな読みと同じように、単語と絵をマッチングさせていく学習を行った。拗音や促音の音と文字が結びつきにくいときは、「きゃ」の部分をクリックすると、音で知らせてくれるパソコンのソフトを使用することで、より音と文字を確実に結びつけていくことができると考えた。

文章読みでは、A児が興味や関心をもって読むことができる内容や、自分の生活に身近で共感しやすい内容の文章を使用した。また、字の大きさは、大きすぎても反対に読みにくくなるというA児の意見を基に、相談

をして適切な大きさを決めることにした。さらに、「今日の内容は～だよ」と大きなテーマや登場人物などをあらかじめ伝えることで、文章を読む抵抗感を減らすようにした。さらに、文章の中に隠れている単語を見つけ出す課題や、言葉を自分で組み立てて、意味のある単語を作る課題（資料14参照）にも取り組んだ。文章の量が増えても、単語を素早く見つけることができるようになることで、意味を捉えやすくなり、文章を読みやすくなることにつながると考えた。どちらの課題でも、ゲーム形式を取り入れて行うことで、A児が、楽しく学習できるように配慮した。

長期目標	○ある程度長い文章（8語分×5）を読んで、問題に答えることができる。	
短期目標	○ある程度長い文章（8語分×5）を読んで、問題に答えることができる。 ○拗音・拗長音の入った単語やカタカナを読むことができる。	
指導内容	手立て	評価
○ビジョントレーニングに取り組みることができる。	・授業の開始の5分間を使って取り組むことで、継続して実施する。（我慢の間・漢字の間・忍者の間の課題を引き継ぎ行う）	□対象物を眼で追いつけたり、素早く探し出したりする力を高める。
○ある程度長い文章（8語分×5）を読んで、問題に答える。	・文章を読む際は、苦手意識を感じないように、量や内容に配慮する。 ・クロスワードなど、ゲーム形式の学習を取り入れていく。	○ある程度長い文章（8語分×5）を読んで、問題に答えることができる。
○拗音・拗長音の読み方を知る。	・カードでのマッチングや、パワーポイントでの学習を取り入れていくことで、繰り返し学習を行う。	□拗音・拗長音の入った単語やカタカナを絵と正確にマッチングすることができる。
○カタカナを読むことができる。	・粘土で形を作る活動を通して、形の違いを意識させる。	

表7 第3段階の学習計画



資料13 粘土で作ろう



資料14 文字サイコロ

## ② 結果

第2段階で達成できなかったカタカナの単語と絵のマッチングは、ほぼ確実に正しく正解できるようになった。しかし、一文字読みでは、似ている文字を読み間違えることがあるため、後も継続して取り組んでいる必要性を感じる。また、促音の入った単語と絵のマッチングは、ほぼ正解できるようになったが、拗音に関しては、まだ間違えることが多い。しかし、「びょういん」を「びゃういん」と音にしてから、「あ、違った。びょういんだった。」と自分で気付いて修正する様子も見られるようになった。自分で音にしてから、絵と比べて修正することができるようになってきているので、まだ、確実に読めるようになったということとはできないが、今後、引き続き取り組んでいくことで、文字と音とが結びつくことができると考える。

文章読みに関しては、教師が大きなテーマや登場人物を予め伝えることで、内容を予測しながらスムーズに読むことができた。また、自分で決めた大きさもよかったようで、「これだったら読みやすい」と言いながら読むことができた。また、文章を読むときに、気がついた単語に印をつけたり、線を引いたりして読んでいる姿が見られた。A児に、この行動の理由を聞いてみると、印をつけたほうが、分かりやすいから、と答えてくれた。単語を見つけ出す課題に取り組んだことで、自分なりに読みやすい方法を考えた姿であると言える。問題を解く際も、同じように見つけた単語に印をつけていく様子が見られた。また、ほぼ正解することができた。

第3段階の結果として、表8に記載されているように評価した。

長期目標	○ある程度長い文章（8語分×5）を読んで、問題に答えることができる。	
短期目標	○ある程度長い文章（8語分×5）を読んで、問題に答えることができる。 ○拗音・拗長音の入った単語やカタカナを読むことができる。	
指導内容	手立て	評価
○ビジョントレーニングに取り組むことができる。	・授業の開始の5分間を使って取り組むことで、継続して実施する。（我悦の間・漢字の間・忍者の間の課題を引き継ぎ行う）	□対象物を眼で追いつけたり、素早く探し出したりする力を高める。
○ある程度長い文章（8語分×5）を読んで、問題に答える。	・文章を読む際は、著手意識を感じないように、量や内容に配慮する。 ・クロスワードなど、ゲーム形式の学習を取り入れていく。	□ある程度長い文章（8語分×5）を読んで、問題に答えることができる。
○拗音・拗長音の読み方を知る。	・カードでのマッチングや、パワーポイントでの学習を取り入れていくことで、繰り返し学習を行う。	□拗音・拗長音の入った単語やカタカナを絵と正確にマッチングすることができる。
○カタカナを読むことができる。	・粘土で形を作る活動を通して、形の違いを意識させる。	

表8 第3段階の学習の評価

## (4) 総合的な結果と考察

下記の表9は、A児の読み書きスクリーニング検査の記録である。

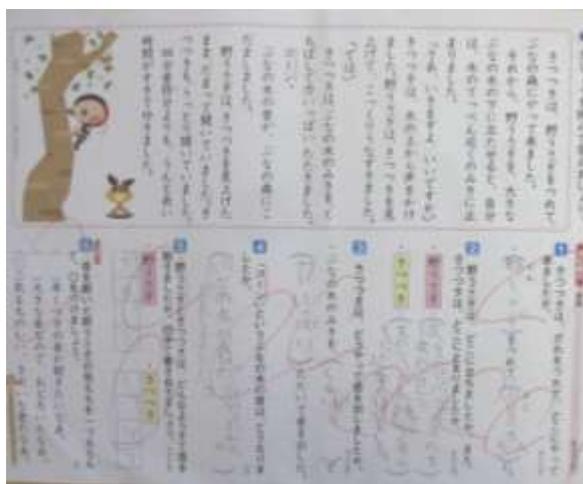
	H26. 12 (指導開始前)	H27. 7 (第2段階終了期)	H27. 12 (第3段階終了期)
ひらがな一文字読み	8/20	15/20	19/20
カタカナ一文字読み	0/20	12/20	18/20
ひらがな単語読み	9/20	19/20	20/20
カタカナ単語読み		13/20	17/20

表9 読み書きスクリーニング検査の結果

指導開始前と比較して、第3段階終了後のテストの結果から、ひらがな・カタカナの一文字読み・単語読みの全ての項目において、正解した数が多くなっていることがわかる。具体

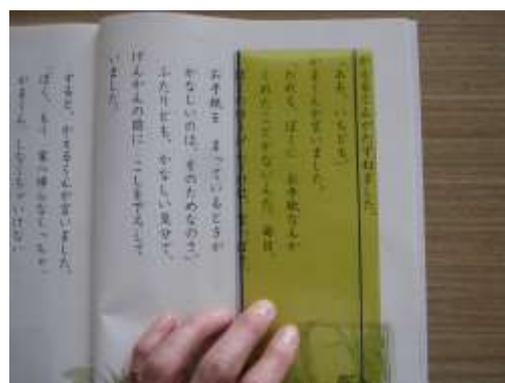
的に見ていくと、ひらがな一文字読みでは、「ぴょ」を「ぴゃ」と読み間違えた。しかし、全問正解しているひらがな単語読みでは、「しょうがつ」を最初は「しゃうがつ」と読もうとしたが、間違いに気が付き、自分で「しょうがつ」と読むことができた。これらのことから、読めない文字が入っている文字でも、A児は、単語としての意味に気付くことで、読み方の間違いにも気づき、正しく読むことができたと言える。これらのことは、A児が単語の意味を理解し、それをつなげて、文の意味を理解していくという、文章を読むときの手順を使用していることである。これまでの学習を通じて獲得した読み方の手段を進んで使おうとする姿が見られるようになったと言える。

資料15は、A児が、3年生の始めに受けたテストの解答用紙である。それまでは、テストを受ける際に、教師から問題文等を読んでもらうという支援が必要であったが、2年生の3学期からは、全部を読んでもらうのではなく、分からない部分を伝えて読んでもらうというように、教師からの支援を少しずつ減らすようになってきた。このテストでは、そのような支援は全く受けずに、自分で読んで問題に答えることができた。同時に、テストに対する苦手意識も減少してきたようで、以前は、困った表情になったり泣き出したりする様子が見られたが、そのようなことは全くなくなってきた。このテストの解答からも、A児は、ある程度長い文章を読み、さらに、その意味を理解することができるようになったと言える。



資料15 A児のテストの解答用紙

また、国語の授業に対しても、A児の意識が、以前とは変化してきた。第3段階終了後に、A児に「国語の授業は楽しい？」という質問を行ったところ、「以前は、大嫌いだったけど、少し分かるようになってきたから、ちょっとだけ楽しくなったよ。」という答えを聞くことができた。また、読む速度が早すぎると難しいけど、音読にも付いていけるようになったことや、教科書に書いてある内容が、少しずつ分かるようになってきたことがとても嬉しいとも話してくれた。国語の時間に、泣きそうな表情で参加していたA児のこのような言葉は、少しずつであるが、国語の学習に対する自信をもち始めていることの表れであると考えられる。



資料16 A児が使用したガイド

さらに、学級で「お手紙」の単元の音読大会が行われた。これは、第3段階の学習を行っている時期であった。時々、自分の読むところが分からなくなるときがあると、A児からの相談を受け、通級での学習の時に、どのようにしたら読みやすいか、一緒に考えることにした。指差しながら読む、スリットで隠しながら読むなどのいくつかの方法を試した結果、A

児は、黄色のクリアファイルの線に合わせて読むガイド（資料16参照）を選択して読みの練習を行った。練習した際に、「これだったら、どこをよんでいいか、分かりやすい」と言い、教室での練習の際にも、使用することにした。本番では、このガイドは使用せず、自分の役割のセリフを、教科書を見ながらしっかりと読むことができた。まだ、拗音が入った単語を読み間違えたりする様子は見られたが、教師が支援することなく、自分で最後まで読むことができた。その際のA児の嬉しそうな表情はとても印象的であった。これらのことから、A児が、もっとうまく読みたいという意欲をもち始めていること、その方法を自分なりに考えようとしている姿の表れであるということが分かる。

これまでの学習を通して、A児は、自分なりの読みの手段を獲得し、それを積極的に使おうとする姿が見られるようになってきた。さらに、「読むことできた」「問題に答えることができた」体験を重ねたことから、少しずつではあるが、国語の学習に対する自信をもち、自分から意欲的に取り組もうとする姿が見られるようになってきたと言える。

## 6 成果と課題

### (1) 成果

- ① 通級指導において、ビジョントレーニングを授業の開始に継続的に実施していくことや、児童の課題に応じてトレーニングの内容を選択していくこと、さらに、児童に分かりやすい形で、できるようになったことを評価していくことにより、児童の見る力が高まった。
- ② 読みの学習を段階的に進めていくことで、一文字読み、単語読み、文章読みの力が高まり、ある程度長い文章を読み、問題に対して答えることができる力を身に付けることができた。また、読むことに対して意欲的になり、様々な場面で、積極的に読もうとする姿が見られるようになった。

### (2) 課題

読めない漢字が増えてきたことによって、文章の意味をつかみにくくなっている様子が見られるようになった。今後は、児童の実態に応じた漢字の読みの指導について、究明していく必要があると考える。

#### <引用文献>

- (1) 北出 勝也(2009) 『学ぶことが大好きになるビジョントレーニング』, p 38
- (2) 北出 勝也(2015) 『発達気になる子のビジョントレーニング』, p 18
- (3) 湯沢 美樹・河村 暁・湯沢 正通(2013)  
『ワーキングメモリと特別な支援』, p 29

#### <参考文献>

- (1) 宇野 彰・春原 則子・金子 真人・Taeko N. Wydell(2006)  
『小学生の読み書きスクリーニング検査』